

令和6年度 いのちの授業 事例集（中学校）【国語】

地区	学年	教科等	テーマ	内 容	参考事項（講師・教材等）
1 川崎市	中 1	国語	「大人になれなかった弟たちに……」	作品の中心は、戦時中の「弟」の生死に関わる「僕」の心情と「母」の言動の描写である。慢性的な空腹状態の中で、幼い弟を愛おしく思いつつもミルクを盗み飲みしてしまう「僕」の心情や、息子が栄養失調で亡くなることにも「弟は幸せだった。」という言葉に込められた母のつらさや無念、その母に対する「僕」の思いが描かれている。心情を直接表すことはないため、行動、会話、情景などの描写を関連付けて、丁寧に作品を読んでいた。また、戦時中という体験したことのない事柄に対しても、小学校で学んだことをもとに考えたり、登場人物の心情を推し量り、登場人物の気持ちに寄り添ったり、筆者の伝えたいことを考えながら作品を読み深めていた。	光村図書 国語 1
2 相模原市	中 1	国語	人の命と人権について	本校では毎年上記の人権と平行して、国語の時間に「人の命と人権」について考える時間を設けている。「かけがえのない命」の大切さについて生徒一人一人が真剣に考え、日常生活にいかしていくことを目指している。	○1学年・国語の教員による授業。
3 相模原市	中 2	国語	人権作文発表会	夏休み課題作文について、クラスでの発表会を行った。	
4 相模原市	中 1	国語	大人になれなかった弟たちに…	身近な家族の死を目の当たりにした筆者の体験を読み、戦争と平和、命の尊さについて考えた。	
5 相模原市	中 2	国語	字のない葉書き	筆者の戦争体験を読み、平和とは何かについて考える授業に取り組んだ。	
6 相模原市	中 2	国語	命のかけがえのなさ	学校祭で歌う学年合唱曲「命あるかぎり」（宮越由貴奈 原詩/若松歓 作詞・作曲）の歌詞の内容解釈をした。小学4年生の宮越由貴奈さんは、「命はとても大切だ/人間が生きていくための電池みたいだ/でも電池はいつか切れる/命もいつかはなくなる……」（「命」より）という詩を作成して、4ヶ月後小児ガンのため亡くなった。授業では、宮越さんの「命」の詩について学んだ後、歌詞の語意や表現を解釈することで、「せいいっぱい生きよう」という宮越さんのメッセージを確認し、理解しようとした。	「がん教育の手引き」（平成27年2月/長野県教育委員会）

7	横須賀市	中2	国語	「セミロング ホームルーム」	背中にセミがついている気弱なクラスメイトを気遣い、どうやってセミを取り除くかを悩む主人公と隣の席の生徒、担任のやりとりを描いた文学作品。 文章を読み進めながら、「なぜ気弱なクラスメイトに直接言わないのか」「気付かないように主人公たちが動いているのはなぜなのか」といった気弱なクラスメイトを思いやる登場人物たちの心情に共感させた。	
8	湘南三浦	中3	国語	具体と抽象をとらえる	メディアによって、ゴリラが悪者と印象づけられて、殺されたりしていたことがある。自分で、情報をしっかり確認して、事実に基づいて、行動する必要がある。子どもたちはゴリラに共感してその教材に納得していた様子だった。	ゴリラの資料映像（ドラミング）を見せて印象づけさせた。
9	湘南三浦	中3	国語	高瀬舟	森鷗外の「高瀬舟」を用いて、尊厳死についてどう考えるかを話し合いさせた。まず、個人で考えをワークシートに書き、それを6人グループで回し読みし、討論した。その結果を教員主導で聞いてゆく形をとった。グループで特定の生徒だけが活躍するのではなく、全員が役割を持たせた（1問目の司会・記録・発表者、2問目では交代等）ので、自分事として取り組めた。	
10	湘南三浦	中3	国語	平和	井上ひさしさんの『握手』を通し、「戦争」や「どう生きるか」について考えた。	
11	湘南三浦	中3	国語	平和教育	「挨拶―原爆の写真によせて」という詩を読み、人間や社会について考えた。従来、広島原爆投下を素材とした作品の多くは、戦争の犠牲者への哀悼や鎮魂が主題であったが、この作品は、過去を教訓とし、これからをどう生きるかという問題を提起している。現代を生きる自分の身の回りのことに照らして主題について考えさせ、それぞれの考えを深めた。	
12	県央	中3	国語	原爆	・「挨拶」という詩を題材に原爆について考えた。 ・いのちの尊さやいのちを奪うことの悲惨さを学んだ。	
13	県央	中1	国語	「大切なもの」は何か、自分の考えを相手に伝え、他の人の考えにも触れる。	「生きる中で、大切なものは何か」をテーマに自分の考えを伝えるスピーチの授業を行った。生徒は、それぞれが人生で大切にしているもの、「友だち」「心」「夢」「いのち」などについて、なぜ大切だと思うのか理由を明確にしながら文章を作成し、スピーチした。その後全生徒のスピーチの原稿が廊下に展示された。その中には「無」「悲しみ」など、説明を読まなければわからないものや、自身の考えとは正反対のものも含まれている。他の人の「大切なもの」に触れる中で、それぞれの考えを認め、自分以外の人への理解を深めていた。他を尊重する心が育つことをねらいとしていた。	
14	県央	中1	国語	命の尊さ	戦争に関する教材により戦時下での状況や、幼くして亡くなった筆者の弟の死を見つめ、命の尊さについて考えさせる授業を行った。近年諸外国での戦争報道もあり、自分事として考えることができた。	「大人になれなかった弟たちに・・・」

15	県央	中 3	国語	戦争	3 学年の国語の授業で、戦争文学を扱った。日常的に自分や家族の命が脅かされる状況を読み取り、幼くして耐えていかななくてはならない登場人物に思いを寄せた。人としての当たり前の感情を持ってない当時の状況や、現時点でもその脅威はすぐ近くにある状態を知り、それをどう捉え、どう考えるべきか問いを立てて自分なりの考えを文章にまとめていた。	光村図書 小説「二つの悲しみ」 詩「挨拶―原爆の写真によせて」
16	中	中 1	国語	戦争と命	国語教材である「大人になれなかった弟たちに」の学習を通じて、「ひもじかったことと弟の死のことは一生忘れません」という作者の気持ちから、命について考えることができた。	「大人になれなかった弟たちに」
17	県西	中 2	国語	様々な生き方	現代短歌の特徴は定型（5・7・5・7・7）さえ守られていれば、詠む題材や言葉の選び方の自由は高く、喜怒哀楽はもちろんのこと、人の「死」さえ題材になることを学習した。それゆえに尊重したいことを理解させるために、対象の短歌を題材として扱った。死の近い母に寄り添う一場面を詠んだこの短歌から、生徒は作者の人間としての温かさを感じ取り、「格好いい」と述べていた。作品には短歌を詠む人の生き方が現れるとの感想を持った生徒が多かった。	短歌「眠られぬ母のためにわが誦む童話母の寝入りし後王子死す／岡井隆」